

P1-086

思春期小児がん患児のエンドオブライフケアに携わる看護師の困難感に関する文献検討

小笠原 史士¹、前田 貴彦²

¹ 武庫川女子大学看護学部看護学科、

² 三重県立看護大学看護学部看護学科

【目的】

思春期は、親から自立し始める年代であるとともに、看護師に対して心情を表出することが少ないといった心理社会的特性が加わることから、エンドオブライフ（以下 EOL）においても成人や他の年代の患児とは異なる困難を伴うと考える。そこで今回、思春期小児がん患児の EOL ケアに携わる看護師の困難感に関する国内の文献の動向を把握し、困難感の内容を明らかにすることを目的とする。

【方法】

文献は、医中誌 web（Ver.5）を用いて、キーワードの「小児」「小児がん」「ターミナル」「看護」「（困難／TH or 難しさ／AL）」を組み合わせ、1999 年から 2019 年までの原著論文に絞り込み検索を行った。抽出された 306 件の文献のうち、小児がんに関する看護師の語り、小児がん看護全般に対する困難および小児の EOL ケアの困難に関する文献、12 件を対象とした。困難感を困ったことや難しいと感じていること、問題に感じていること、葛藤していることと定義し、対象文献の困難感に関する記述を類似性から内容を整理した。

【結果】

対象文献の困難感の記述内容は、「患児が診断や予後について質問してきたときの対応」のような『患児とのコミュニケーション』、「家族から死に関する話をされたときの対応」のような『家族とのコミュニケーション』、「EOL 期に化学療法を行うことの妥当性について医師と相談すること」のような『医療チームとしての連携・協力』、「延命治療を家族が希望する際に医療者としての意見を述べること」のような『家族とのインフォームドコンセント』、「患児に使用する鎮痛薬について理解している」のような『EOL 期の治療や看護についての知識・技術』、「面会や付き添いの制限などの病院の規則を子どもの状態に応じて変更すること」のような『入院環境やシステム』、「亡くなりゆく子どもに向き合うこと」のような『看取りの中での感情のコントロール』の 7 つのテーマに分類された。

【考察】

今回の結果から、思春期小児がん患児の EOL ケアに携わる看護師の困難感には、「患児・家族側」および「医療者側」を要因とする二側面であると示唆された。しかし、その困難感は成人患者の EOL ケアと共通する内容もみられた。よって、思春期の特徴を踏まえると、今後より思春期がん患児に特徴的な EOL ケアの困難感を探求するための研究が必要であると考えられる。

P1-087

退院後の小児がん患児をもつ両親のレジリエンスの体験 — テキストマイニングによる自由記述の解析から —

辻本 健^{1,2}、横山 由美³

¹ 埼玉県立大学保健医療福祉学部、

² 自治医科大学大学院 看護学研究科 博士後期課程、

³ 自治医科大学看護学部

【目的】

小児がん患児をもつ両親は、退院後に我が子の再発の可能性・将来に関する不安等、心理社会的問題を抱えていることが明らかにしている。一方、小児がん患児の両親の全てが重度の不安・抑うつ状態に陥るわけではない。人は、逆境に立ち向かったり、克服したりすることで、レジリエンスを強化したり、変容させることができる。本研究は、退院後の小児がん患児をもつ両親のレジリエンスの体験を明らかにし、レジリエンスを高める看護援助を検討することが目的である。

【方法】

北関東の血液専門医がいる小児を専門とする病院の中で、日本小児がん研究グループの治療を実施している病院 2 施設の、退院移行期の 1 年以上を経過し、外来を受診している小児がん患児（0 ～ 14 歳）の両親を対象に無記名自記式質問紙調査を行った。レジリエンスの体験の時期、具体的な出来事について自由記述による回答を求め、計量的テキスト分析ソフト「KH Coder」（ver.3）を用いて分析した。分析は、回答内容の出現頻度を算出し、頻出語を用いて、語と語の結びつきを探るために共起ネットワーク分析を行った。所属機関の研究倫理委員会の承認を受け実施した。

【結果】

調査用紙は、研究対象施設 2 施設で 100 部配布した。回収数 39 部（39%）、有効回答率 100% であった。レジリエンスの体験の時期は病気発症直後、入院中、退院後、外来通院中等であった。単語頻度分析から総文数 184、総段落数は 30、抽出語数 4839、異なる語数 869 を抽出し、抽出語の高い出現単語は、「子：56」「入院：36」「思う：26」「病気：24」「娘：20」「前向き：18」「不安：16」等だった。共起ネットワーク分析の結果、＜子－入院－前向き－気持ち－病気＞がネットワークとなり、また＜家族－分かる－考える＞が繋がっていたことが明らかになった。

【考察】

退院後の小児がん患児をもつ両親は、病気になっても前向きな子どもの姿を見ることが家族と一緒に頑張ることによって前向きな気持ちになっていた。また、退院後は同じ境遇の親と話をすること等で少しずつ普通の生活に戻り、安心感につながっていたことが明らかになった。本研究で明らかになったレジリエンスの体験の時期やレジリエンスの体験を踏まえ、レジリエンスを高めるための看護実践能力向上に向けた教育方法の検討の必要性が示唆された。